東日本大震災五年記念企画

10句＆随想

＊は既発表句

阿部　菁女	阿部　流水	池田　紀子	伊澤二三子
上野まさい	梅津　昌広	大河原政夫	大久保和子
太田サチコ	小笠原弘子	遅沢いづみ	小野　道子
鎌倉　道彦	神野礼モン	日下　節子	黒田　利男
草野志津久	後藤　悠平	斎藤真里子	坂下　遊馬
坂本　　豊	佐藤　成之	佐藤　みね	清水　里美
杉　　美春	須﨑　敏之	田村　慶子	丹羽　裕子
土屋　遊蛍	中鉢　陽子	津髙里永子	土見敬志郎
中村　　春	永野　シン	浪山　克彦	野田青玲子
服部　奈美	平山　北舟	松岡　百恵	松本　　芳
丸山千代子	丸山みづほ	武良　竜彦	吉野　秀彦
山田　桃晃	渡辺誠一郎	高野ムツオ	

【東日本大震災五年記念企画】

鎮魂の橋

阿部菁女

梅雨晴れの一本松の寂しさよ
夏鶯呼べば応ふるところにて
やませ吹く小石ヶ浜の貝鳴らし
海女が畑雨降り花の小ぶりなる
三陸や入江入江の合歓の花
観音に額づく時のほととぎす
空蟬の眼に法灯の映りゐる
花水木ここまで津波来しといふ
百合抱いて鎮魂の橋渡りけり
鉄(くろがね)のかくまで黒し梅雨あける

大津波の被災地、陸前高田市は亡き母の故郷である。被災当初はあまりの惨状に、行くのをためらったが、五年が過ぎ復興への槌音の高まる今、いつまでも目を背けてはいられない、と心に決め現地を訪れた。ＢＲＴを降りた所に、当時とは一変した小さな小さな駅があった。駅前通商店街は無く、市庁舎もプレハブ造りだ。鮎釣りの名所気仙川から海岸一帯は何も残っておらず、市内至る所が嵩上げ工事や防潮堤工事の盛り土と重機類ばかりが視界にとび込んで来る。有名な松林は既に姿を消し、「奇跡の一本松」だけが形をとどめている。そして梅雨晴れの日を反射する広田湾の穏やかな海面が痛々しいばかりだ。

私はなす術もなく、沖に向かって深く一礼し合掌するしかなかった。本当に人間の力など、大自然の前には弱いものである。おそるおそる現地に足を運んだ私に、地元の方々の心優しい言葉「お見舞い有難う」の声は胸にしみた。かの世の母も同じ気持ちであろう。

（菁女）

【東日本大震災五年記念企画】

三月や

阿部流水

三月や眼裏に立つ黒い波
壊滅の浜にて海市遠眺め
津波禍の沼岸包み夏霞
壊滅の浜の草叢蝶生まる
亡き人の影に寄り添い黒揚羽
被曝者の胸の内なる春嵐
汚染土の袋積み上げ麦の秋
人影のなき被曝街日の盛り
廃屋は葛の天下や被曝の地
汚染水なんぞ蹴散らせ土用波

東日本大震災の風化が言われているが、被災者の悲惨な体験や心の傷は、何年経っても風化するものではない。風化が起こるとすれば、震災部外者、行政、地域の諸団体などが震災の被害や教訓を共有することを忘れていくという点にあろう。

こうした風化を防ぐためには、大震災を語り継ぎ、防災対策や訓練を怠らないようにすることが肝要である。とりわけ津波被害と東京電力の原発事故被害については、無残な状況をつぶさに語り継ぐ必要がある。苦悩の体験を被害者だけに背負わせることなく、一般市民も負の遺産を共有して後世に伝えていく努力が求められよう。

われわれ俳句にかかわる者も震災体験者に心を寄せ、想像力を働かせながら句作したい。井上ひさしが戦後70年の時を超えて広島、長崎の被爆者や遺族に心を寄せつづけて、「父と暮らせば」などの作品を書き残したように！

（流水）

【東日本大震災五年記念企画】

春の雪

池田紀子

＊春の雪仮設出る人とどまる人
花曇り五年目の仮設解体す
そして誰もいなくなった村花満開
原子炉に落椿ひとつ置くように
春愁や立て掛けしままフランスパン
＊おぼろ月遺構鉄骨の浮び出る
原子炉を一直線に雲雀落つ
奉納の写経一枚虹立てり
＊廃校を怒濤に告げて卒業す
＊組まれゆく高き鉄骨落花浴ぶ

最近何かすっきりとしない心の迷いを私自身感じており考えた揚句、恐山に行けば何か摑めるかもしれないと決断した。約五時間掛け新幹線・ＪＲ青い森鉄道・大湊線を使い下北に到着。その後バスで四十分掛け恐山に到着。本州最北端下北半島地蔵信仰の地ともいわれる北の霊場恐山菩提寺である。恐山はカルデラ湖の宇曽利湖（うそりこ）の外輪山である。参拝順に従い賽の河原から慈覚大師堂、八角円堂、極楽渓と巡る。地蔵尊が立ち並び火山性の石がいたる所に積まれ又、風車があちこちに廻っている。やはり全体として異界を思わせるが何か東日本大震災を思わせる景色でもある。火山石に色彩が無いのである。あちこちに硫黄の匂いがしておりガスが噴出している。宿坊に二泊したが部屋の中まで硫黄の匂いが漂っている。朝の御勤めも僧侶の読経に始まり有意義であった。夜は写経に励み写経二枚を奉納することが出来た。心の塵を払うことが出来た二泊三日であった。

（紀子）

【東日本大震災五年記念企画】

蕗の薹

伊澤二三子

＊地震あとライフラインは春の闇
＊春の地震仁王立ちなる鬼子母神
＊亡き人の魂濡らす春の雪
＊余震なほ余震を重ね町薄暑
＊地震あとを花びらのごと金魚浮く
＊瓦礫へも影を落として夏の蝶
＊地震あとの夕波集め蛭蓆
＊待春の灯を窓毎に仮設村
＊このあたり玄関跡か蕗の薹
＊鎮魂の言葉を溜めて初桜

震災から五年四ヶ月が経ち、仙台市では、災害公営住宅が完成した。プレハブ仮設も九月までに退去する見通しとか。仙台駅前の30本の植え込みを見るたびに23・3・11・2時45分の大震災日を思い起こす。この立木にしがみつき駅舎の揺れる地震の止むのを待った。

私たちはこの時刻前に上り電車の中で発車を待っていたが、携帯の地震速報で下車、まもなく激しい地震となりホームのゴミ箱へ一時身を寄せた。構内放送で全員駅前に出され完全に駅は閉鎖された。タクシープールは一台もなく、逃げ出した人々が肩寄せ合って立ち竦む。バスは仙北方面のみで雪が降りだす。岩沼のご婦人とやっとの思いでタクシーを拾う。光源は車のライトだけで大河原迄延長して貰い自宅近くで降車。道路は液状化してトラ縄が張られ電柱や用水堀のU字型が傾いていた。玄関前の車の中には夫、娘と乳幼児が待機。右往左往の中危機一髪の合間を縫ってきた我をみて手をにぎり合った。

（二三子）

【東日本大震災五年記念企画】

知子の国

上野　まさい

ビルのごとき瓦礫の記憶遠山火
被災地は地続きなりし青き踏む
みちのくを歩くもゐにし牡丹の芽
揚ひばり津波削りし大地より
錆びつきし斧横たへて花の昼
潮騒のみちのく時の記念日も
遥かなる知子の国へ泳ぐなり
とこしへに人擦れちがふ天の川
被災地に弾けてとんで鳳仙花
みづいろの水母と浮かぶ地震の国

石巻に土屋遊蛍さんを訪ねた日、ＪＲ仙石線が復活していた。東日本大震災の大津波でＪＲの鉄路が破壊され、不通になっていた。その仙石線が五年振りに復活したのだ。地元の人々も街に活気が戻ることに大きな期待を寄せておられることだろう。とてもうれしい。

元の線路だった地域の地面は津波により建物もろとも流され荒野と化していた。鉄路に適さない、との判断で現在地に移されたようだ。新しい線路は山裾にそって石巻駅に向かう。海側を走っていた頃の海の風景が無性になつかしかった。

これは聞いた話だが、石巻市の中央を流れる北上川。その川の中洲に岡田座という映画館があったそうだ。（昔は歌舞伎も演じられていたという。）その岡田座が大津波で瓦礫となってしまった。こんなふうに人々の思い出の建物や風景が失われていくことは誠に淋しく口惜しい。このような事実や光景は、記憶にある今だから書ける。そして話すことが出来る。更に、今だから語り継ぐことが必要なのではないか、と強く思った。

（まさい）

【東日本大震災五年記念企画】

なゐ

梅津昌広

＊寒なゐや大地も癲癇発作あり
＊なゐの子のよた生まれけり三月忌
動画再生後また津波（註 よた）よみがへる
＊唖み合ふ心捨て去り海鼠かな
釈迦のをしへのごと春の光あり
あす死ぬとしても飯食ふ春の朝
まだ買はぬ顰蹙の値踏み四月馬鹿
性に目覚める頃のごと芽ぶきをり
意にしだれ動機をくすぐる桜かな
空蟬に死蟬の聖体納棺す

震災から五年が経過し、被曝の問題はますます深刻な状況になりつつある。福島県の小児甲状腺癌は、二十倍から五十倍の多発であるという。すでに百人以上の甲状腺癌の、摘出手術がおこなわれたという。このような状況はもはや、福島県が安全ではないことをものがたっている。やがては、成人にも影響が及ぶであろう。放射線量の高い地域では、昆虫の奇形がはじまっているという。

身体に障害を持っている知己からきいた話なのであるが、放射能と関連づける明確な左証はないけれども、パーキンソン病患者がつぎつぎに亡くなっているという。その会の会長が、最近突然亡くなったということである。まだ四十代であったという。原発作業員に関しては白血病を発症しているのである。このような状況をおしはかるならば、いまだに非常事態といわねばならない。

（昌広）

【東日本大震災五年記念企画】

置き捨ての

大河原　政夫

初蝶来名札の大き防護服
笑ひつつ雲雀の墜つる汚染浄土
主のなき牛の群れゆく茂りかな
＊置き捨ての玩具のねむる梅雨の底
＊棄民といふことば夏野にしづみゐて
＊原子炉を囲ひし冬の闇無辺
風評に耐へるふくしま冬柏
三月十一日パペットの赤き唇
＊穢土なるもここがうぶすな新樹立つ
＊銀河濃し四十年後の山と川

あの日郡山で一緒に大地震に遭遇したいわきの友人は、すぐさま取って返し、三日後、「自宅が津波に呑まれた」とようやく伝えてきた。グーグルの航空写真地図を拡大するとその惨状に慄然とした。良く通った小浜港そばの食堂は跡形もなく消えていた。海岸線をなぞってみると、豊間や薄磯の壊滅的な景色が撮し出されていた。被災地への立ち入りが許されるのを待って現地へ。そこには、はらわたの抜かれた家々。無惨な光景が延々と続いた。気になっていた久の浜の隠れ江を訪ねてみた。ここは、いわきに住んでいた頃のお気に入りの場所である。震災で焼けた町を抜け、崖下の小さな入江に着いた。だが、そこには以前と打って変わった姿が。打ち上げられたパジャマやランドセル。海に寄り添って生きてきた人々の生活の残骸が山積していたのである。以来、余りにも恨しすぎて、その入江には行けずにいる。

（政夫）

【東日本大震災五年記念企画】

ポインセチア

大久保　和子

＊愛でる人の無きこと淋しがる　花は
＊秘めし力体温として残花かな
＊ひと影か海石（いくり）の影か春霙
＊黙祷す雲三月の日を隠し
＊雪になれぬ雨やしきりに強くなる
　消ゆるとは春の雪降らすことなり
＊生き残るには訳のありポインセチア
＊淋しくはないかと冬の海を見に
　断ち切られし夢のただよふ冬の海
＊毬のまま精霊となり冬紫陽花

一目千本桜で知られる柴田町に住んでいる。花見には全国から人が集まり、本線沿いの土手は大いに賑わう。その時期駅近くの喫茶店を手伝って十年になる。しかし震災のあった年、客足はぱたりと消えた。勿論地元の人でさえ姿を見せない。花見で浮かれている場合ではないと。いつもと違う空気を桜も感じていたのではないだろうか。

そんな時に店を訪れたのは、近くの太陽の村など近隣の市町の施設に避難していた方方である。口数も少なく漸く「気晴らしに出掛けて来ました」と。そして、新築の間もなく引越した家が流され借金だけが残ったこと、トイレの梁にぶら下がって水が引くまで三時間も耐えたこと、運良く高台にたどり着けたことなど、命拾いしたことだけが救いというように語ってくれた。

その後どんな暮らしをされているのかはわからないが、何とか無事に生き延びていただきたいと願うばかりだ。

（和子）

【東日本大震災五年記念企画】

大震災から五年

太田サチコ

雨音は魂の詩額の花
幼霊の眠る海底雲の峰
現世の業を背負ひて毛虫這ふ
サーファーの捉へし波や早や五年
トラウマは渡せぬままに春の浪
行く道の扉は見えず蝸牛
海境の声とも思ふ秋の潮
遠くなる記憶は地震の黄水仙
幼霊は星の欠片となりて飛ぶ
胸奥の傷は未だに門火焚く

東日本大震災から五年の年月が流れたが、普段の生活はもう五年というべきか。被災地の海辺に行くと、まだ五年と思うべきか複雑な気持ちになる。海は何事もなかったかの如く昔と同じ営みを繰り返している。

ただ五年前との違いは、震災前の浜辺の道路を車で走れば、サーフィンを楽しんで居る若者の姿等が見られたが、今は道路も広く整備され新築の家屋が並び、防波堤は高く積み上げられ、サーファーも釣人も砂浜も見えず故郷の景色が変わりつつある事を改めて、実感させられる。しかし今後更に五、六年の月日の年月が流れれば、きつと見慣れた風景として受け入れている自分が居るのであろうと気付かされる。震災後の私の心掛けている事は、水、ローソク、マッチ、懐中電灯、持病約、ダウンコート等の常備である。

我家は半壊であったが、家族や家屋を失った被災者の事を思えば、黙する外に方法を思いつかない日々である。

（サチコ）

【東日本大震災五年記念企画】

春の嶺

小笠原　弘子

＊この身ありて白木蓮の日暮くる
＊あの日のコート深き闇より取り出せり
＊春の虹別れも告げず逝きにけり
＊海霧のとどかぬところ魂溜まり
＊青蘆の揺らぎ一本づつ弔旗
＊悼むとは忘れないこと秋蛍
＊身のうちに記憶の一樹小鳥来る
＊三陸や胸の奥処に春の泥
＊無事という言葉の重味蕎麦の花
＊震災のつぶさ見て来し春の嶺

あの日平成二十三年三月十一日の午後犬の散歩を終えて家の中に入ったところ轟音と共に巨大地震が起きた。あまりにも突然の予期せぬ出来事であった。居住していた東松島市野蒜地区には約五千人住んでいたが大津波により約五百人の方々が犠牲になられた。

豊な自然に恵まれた美しい風景が一瞬のうちに消えてしまった。

仙台に移り住み不安を感じながら第一歩を踏み出した。心の痛みを見つめ俳句に思いを託すことから次第に事柄を客観視する事ができ前向きに考えるようになった。俳句から生きる力を頂いたのである。

無事という言葉の重み蕎麦の花

震災を経験した事により四季折々の花の美しさを今年も眺められる無事の有り難さを感じている。

（弘子）

【東日本大震災五年記念企画】

葦揺れる

遅沢いづみ

＊夏の雨あれからいろいろが変化
＊手を洗ひ暑中見舞を読み返す
＊天高し台所より震度3
＊ねこじやらしどんな時代に生まれても
＊鳶高く地球は丸く枯芒
＊葦原の国揺れ止まぬお正月
＊ヨシ焼き再開みんなカメラを持つてゐる
＊豪勢な桜撮る人防護服
＊十五夜の栃木南北震度4
＊木枯しや巨大建屋は夢の跡

私は関東住まいなので、東京電力の電気で暮らしている。3・11の揺れは震度6だった。職場から帰る途中、東電の車がサイレンを鳴らして走って行った。復旧作業なのだろう、ありがたいなと思った。

被災者の子供達の作文集「つなみ」を読んだ。原発の町で育った少女は、もう一度、原子炉の建物を見ながら、花見がしたいという。少女は原発が非難されることに、心を痛めている。原子力発電所で働く人が悪かったわけではない。地震と津波は誰のせいでもなく起きた。原発を信じ、東京電力を誇りに思っている少女の思いが、どうか、片思いでないことを願い、原発事故が二度と起きないことを祈る。

明るい未来をつくるのは何だろう。塗装の落ちた文字に色をつけるのは何だろう。看板は撤去されている。明るさを残像としての未来を、少女らは描かない。

（いづみ）

【東日本大震災五年記念企画】

旱星

小野道子

風紋に声残りをり旱星
白南風やトランペットの音途絶え
さがすやう海の中へと二重虹
梅雨夕焼サンファン号の旗静か
今日もまた小雪なる海手を合はす
庭先の小なすきうりや盆用意
蔵王嶺の滴り梅花藻を育て
薄氷折鶴乗せて河口へと
被災者のいまだ点滅梅雨の月
海みゆるこの遺構にも日脚伸ぶ

【東日本大震災五年記念企画】

記憶

鎌倉道彦

＊三月の慟哭消えず海の青
泥だらけの卒業証書棺の上
草青む陥没の地に津波禍に
三月のラジオの絶叫耳の底
死亡欄幾度も開くおぼろ月
眼裏に消えし街あり春の海
三月の突き刺さっている眼あり
津波見し照井翠の眼冷ゆ
震災の写真を閉じる大西日
陸奥は喪の中にありぼたん雪

海岸線を南下し、女川から石巻に入った。真新しい建物が建ち、渡波駅の辺りは活気を呈していた。整備された漁港を通り、三年前は瓦礫と更地だけだった長浜地区へと向かった。かつて私が住んでいた所である。

波音が大きくなるにつれ、景色が一変した。新しい家や工場が建ち、瓦礫は見えない。だが、浜の近くには手つかずの更地がまだ、至る所にある。わたしの勤めた学校も同じく、グランドも草に覆われた更地だ。野外学習の場だった浜も松原も今はない。それらを囲むように、高い防潮堤が砂浜を削り、どこまでも続いている。グランドの隅に、電柱が一本残っていた。茫々とした夏草の中、電柱は蔦を纏い傾きながら立っていた。

そこには、もう私の生活した景色はない。残っているのは、私の中の記憶と映像だけである。この記憶と映像をいつまでも留めよう。と、思いながら家路についた。

（道彦）

【東日本大震災五年記念企画】

虚空

神野礼モン

＊砂浜の足跡消えず凪
＊木の芽風天神地祇の声をのせ
＊潮風に幼子の声石鹸玉
＊塩竈に海鞘売りの声よみがえる
＊玫瑰や三陸の海まだ癒えず
＊空蟬のセシウム消えぬ重さかな
　夏草の空地雀のホバリング
　月明の渚で踊る影と影
＊浜昼顔地震の爪痕消えぬまま
＊小春日や津波を語り出す老夫

東日本大震災から三ヶ月位経った頃だろうか。ウクレレサークル仲間と一緒に避難所となっている女川の小学校へ慰問する事になった。果たして被災地の皆さんは私達を受け入れてくれるだろうかと複雑な気持ちのまま避難所へ到着した。私達の思いは杞憂で、むしろ満面に笑みを浮かべた皆さんの方の心からの歓待を受け励まされていた。懐メロを歌いはじめると涙しながら口ずさむ人、フラダンスを披露すると一緒に踊り出す人もいて心一つになり、お別れにはお互いに肩を抱き合いながら再会を約束し避難所を後にした。心を一つに復興へと歩むべく一助になればと思う一心での慰問であった。

先日、夫の故郷の陸前高田への墓参りに行った帰りに被災地に立ち寄った。高田松原は三・一一の大津波により七万本の松すべてが倒され、奇跡の一本松だけが痛々しく残っていた。少しずつ復興が進んでいるものの闘いはまだ終わっていない。絶対に災害を風化させてはならないのだ。

（礼モン）

【東日本大震災五年記念企画】

空の色

日下節子

村閉ぢる新緑の風そのままに
被災地の空に鳶の輪黄水仙
瓦礫にも日溜まりのあり犬ふぐり
子らの集まつてゐる陽炎の向う岸
夏の蝶海の記憶を曳いてくる
記さねば消えゆく月日夏の月
無言なる万のたましひ濃紺菊
秋風の吹きわたりたる仮設村
凍空や被災地に灯のあかあかと
初雪や瓦礫の先の空の色

東日本大震災後、五年の歳月が流れた。被災された方々の流された涙は、どれほどだったことでしょう。

内陸に住む私にも、悪夢の数日であった。夫は、慢性閉塞性肺疾患（ＣＯＰＤ）を患い電気で酸素を作る在宅酸素療法で命を繋いでいた。あの震災でインフラがすべてストップしてしまった。電気が命の夫にとって、もう命が絶たれてしまう。必死だった。一縷の望みを持って、陥没のある道路を息子と先づ酸素ボンベ取扱い店へ向かった。もう品切でやっと一つのボンベを手に入れたが、持つのは半日程だけだ。すぐ仙南中核病院へ夫を連れ駆けつけた。もう病院の電源には患者が群がっていた。夫達数十名は、隣町の公民館へとの指示があった。公民館は寒かったが、自家発電のお陰で命を繋ぐことができた。三泊四日の避難生活ではあったが、人と人との温もりがありがたかった。震災の三年後、頑張って生きた夫も他界してしまった。

（節子）

【東日本大震災五年記念企画】

鳥雲に

黒田利男

天を衝く防潮堤や鳥雲に
亀鳴くや漂流止まぬ汚染土嚢
花万朶帰還困難区域にかな
春宵や更地の街をラッピングバス
戻りしは蟻の列のみ礎石跡
鎮魂の離島に捧ぐ揚花火
その中に人魂いくつ螢の夜
幼齢のならぶ慰霊碑小鳥来る
海光や隙間ばかりの冬木立
津波来し川とも知らず浮寝鳥

千年に一度の未曾有の東日本大震災から早くも五年が経過しました。発生当初はこの状況下で俳句で詠むということに戸惑いがありました。しかし句会の先輩から「歴史的な事態に遭遇したのだから記憶に刻むべきだ」と伺い、震災詠を勧められました。そこで「小熊座」の「東日本大震災緊急特集」に応募し二十三年七月号に二十句を掲載していただきました。これにより震災詠に対する気持ちの整理も出来ました。

震災後復旧、復興が進み目に見えた変化も出て来ておりますが、まだまだ問題は山積しております。また時間の経過と共に大震災の課題が風化してゆくことも指摘されております。このことにつきまして個人的に出来ることはまことにささやかですが、折りにつけ大震災に関わるテーマに触れて詠んで、そして色々な場で発信していきたいと思っております。

（利男）

【東日本大震災五年記念企画】

菫の庭

草野志津久

＊菫の庭被曝の庭として暮るる
＊汚染土を積み置くそこは紫陽花領
＊三月十一日鳥魚虫の眼にも
冬苺遠くてつくづく近き死よ
発車までの寒さや空へ行く電車
＊大夕焼け三月十一日やはり
＊それでも鳥は巣を組む請戸小学校
ひばりひばり腸浚われし家の空
炎天やフレコンバックてらてらてら
フクシマのたんぽぽサラダ諦めないために

毎朝居間のカーテンをあける時、まっさきに目に入るのは、緑色のビニール袋に覆われた除染後の土の山。除染してもうすぐ二年になるのに、この違和感は消えない。同じ緑なのに庭の緑からテラテラ浮いている。

いろいろな花がこの小山に落ちては消えた。椿、桜、そして沙羅、今は萩が一枝細々と伸びている。これは除染ではなく移染ではないだろうか？　でも福島の人は耐えている。地震や津波で家や家族を失ったわけではないからだ。かつてこの庭は狭いながらも菫やタンポポの咲く優しい庭だった。春には菫ごはんやタンポポサラダで人をもてなした。今、山菜も筍も秋のきのこも高いお金を出して、スーパーで九州産なんぞを買っている。主婦にはとても哀しくバカバカしく腹立たしい現実だ。でも福島は耐えている。ただ・ち・に人が死ぬわけではないからだ。でも日がたつ毎に不安と怒りは増してくる。可憐な菫とタンポポになんと遠い現実なのだろうか。

（志津久）

【東日本大震災五年記念企画】

みちのくの蟬

後藤悠平

＊濤全て冴ゆる二時四十六分
＊大障子開くフクシマ見ゆるまで
＊一片として死者への落花重ならず
＊盛土が国見の大地月朧
＊白梅や死者の掌ほどの町
＊藤が藤人はセシウム吐き続く
＊春光にかざす両の手帰還の地
＊やませ吹く夢は帰郷の途中まで
＊みちのくへつながる蟬の穴一つ
＊福島の汚染土尽きず蚯蚓美し

地震の最初の記憶は、一九六四年の新潟地震。山形の明治時代の建築の木造校舎が揺れた。集団帰宅時、晴れている空に虹がかかる。

三月十一日。東京都文京区茗荷谷でビルの五階で揺れる。テレビ中継の津波の画面。同じ世界のことかと驚愕する。研修会場にいた阪神・淡路大震災の被災者がパニックを起こす。その後、池袋経由で中山道・R十七号をひたすら歩き、荒川の戸田橋を渡り、二十時過ぎに帰宅を果たす。街灯の無い、時々月明りの町が息を潜めているようであった。

福島第一原発はメルトダウンとなり、レベル7の深刻な事故となる。私は三十年前に現場に行ったが、見る影もない姿となる。広島、水俣といまだ乗り越えられない人類の課題を増やし、さらに子孫に残すのだろうか。

俳句という姿を借り、果たし切れていない原発のない世界へと言葉を刻んでいきたい。

（悠平）

【東日本大震災五年記念企画】

開かぬ楽譜

斎藤真里子

＊大空は亡き人のための初桜
＊花冷や月光とどく海の底
＊海ありて海に吹かれる石鹸玉
梅雨深し奏者待ちゐる黒き椅子
麦の秋ピアノの余韻消えしまま
永遠に開かぬ楽譜水中花
海色を着て海の日のコンサート
＊夏の夜の海鳴にある記憶かな
カンナ燃ゆ海に眠れるわが友へ
＊曼珠沙華人の生死の外に咲く

東日本大震災より五年が経ちました。私の住む仙台は普通の生活に戻り、大部不自由さは無くなりました。その反面、フクシマの原発事故による放射能の問題、汚染土、避難所生活等まだまだ乗り越えなければならない問題は残されています。これらの問題に直面し葛藤している方々も沢山いらっしゃいます。そして問題はますます深刻化する一方で、少しずつ風化しつつある事も事実です。また肉親や友人等を亡くされ、癒やされぬまま過ごされている方々も大勢います。私も長年ピアノを共に学んできた友人が津波に流され亡くなりました。毎年一緒にコンサートを開催し、厳しい練習も互いに励まし合ってきました。普段は心優しい気配りのある彼女も、音楽に対しては情熱を持ち、妥協を許さない尊敬できる友人でした。五年という月日を経て、松島の海に眠っている彼女に捧げる追悼の思いで作句しました。震災により犠牲になられた全ての亡き人を祈りつつ。

（真里子）

【東日本大震災五年記念企画】

風花

坂下遊馬

＊線香花火の閃きすべて魂の声
＊風花のやうに風化す産土は
＊地縁まで攫はれたるが蘆茂る
＊卒業子二つの校歌持ちにけり
＊海見えぬ海沿ひの道夏の草
＊海辺みな疎林となりて望の月
＊鉢のみが残りし仮設春の昼
＊玫瑰や竜骨折れし小舟あり
＊黙祷の眼裏に海春の雪
＊海沿ひの破屋の一戸浜昼顔

東日本大震災から五年が経った。被災地では、今なお、十八万人が避難生活を余儀なくされている。宮城、福島、岩手三県の仮設住宅の入居者は約六万人。大震災という艱難辛苦を乗り越えるためには、どれだけの歳月があればいいのだろうか。

一方で、震災の風化が始まっている。被災者であった自分でさえ、毎日の生活の中に埋没し、いつの間にか震災を忘れてしまっていることに気づく。それは、音もなく地上に舞い散る風花に似ている。

被災地沿岸には「風の電話」、「漂流ポスト」「頑張ろう！石巻」の大看板、「請戸小学校」など、犠牲となった家族や友人に心の声を届けたり、メッセージを書き残したりする場所が今も続いているという。俳句においても、これまでたくさんの震災句が作られ、句集から編まれてきた。震災の記憶を風化させないためにも、震災句を作り続けること、震災の語り部としての「俳句力」を信じたい。

（遊馬）

【東日本大震災五年記念企画】

楢葉標葉

坂本豊

＊方舟や原発流民十余万
＊除染てふ洗脳ならん春寒し
＊楢葉標葉山河を容るる代田なし
＊喉曝す凌霄の花被曝の地
＊原発や時に鬼灯の燈で足りる
＊帰還とは戦地の話鳥雲に
＊梅三分はらから四分五裂して
＊産土を棄つやたんぽぽの絮に種
＊ふくしまや抗ひて種蒔けばこそ
＊産土や夜の森さくらさくら咲く

「福島の復興なくして我が国の復興はない」と叫ぶこの国の領袖、この未曾有の災害を天罰と言い、住民が声を上げると金目あてと難じた希有な政治家もいる。私の肉親・縁者、竹馬の友、学びの友そして全ての地域の人々が現在に到るも強制避難となり、その殆どが産土への帰還を諦め、且つ家族は二つ三つにも分断され、他郷での新しい生活を始めている。彼らの誰もが住まなくなった産土は、やがて歴史遺産となり、復興は幻にも近い。私の祖先は二百三十年程前の江戸天明の大飢饉時代、相馬藩のPRソングに踊らされ、越後地方からこの原発地域に移住（逃散？）して来た農民の群れだ。そして今度は、この豊かな国で強制移住（棄民？）させられ産土を出た。二百年後の子孫達は、この私達のことをどの様に語り継ぐのだろうか。還るべき古里を失った私の俳句は、いつとはなしに産土への嘆きとなり、確かな言葉を失った溜息の様なものである。

（豊）

【東日本大震災五年記念企画】

虹の裏側

佐藤成之

津波来る巨大な神の舌となり
瓦礫から壊れた玩具と草の芽と
浅春の砂のきらめき命とは
花冷の人の胸にも津波痕
大震災慰霊碑風の光るのみ
大津波死者にも月日ありて夏
慰霊碑に集うたましい夏の雲
陸前のかなしみ虹の裏側に
宵闇の波音ばかり津波の地
海に降り注ぐ月光死者のため

先日、居住する集合住宅で自転車の持ち主確認があった。早速、所有者有りのシールを貼り付けに行くと、タイヤはすっかり空気の抜けた状態。大地震の影響で交通機関が不通になった時、慌てて用意した通勤用二輪車。あの日を忘れてしまったかのように、置きっ放しのまま五年の歳月が経っていたのだ。

二〇一一年三月末までのおよそ一年間でのユーチューブ再生回数一位は、東日本大震災関連との発表を目にした。地震発生後一週間では、九六〇〇万回以上の動画が世界中からウォッチされたと。が、現在では日本国内でさえその関心が希薄になったのではないか。

原発をはじめ被災地の諸問題はますます深刻化するばかりだ。この地に生きる人間のひとりとして、蝦夷の血を夷狄の魂を今こそ強く感じる。決して他人事であってはならないのだ。そして、東北人そのものであった鬼房先生の厳しくも優しいまなざしを思い出す。

津波跡また暖かな海が見ゆ

（成之）

【東日本大震災五年記念企画】

月見草

佐藤みね

＊翼みな下げて迎える三月十一日
＊波音も挽歌となりぬ三月来
牛の声春日に影を作りけり
塩害の土管を越えて燕来る
またきしむ大地のありて春の月
礎石にも家族の気配つくづくし
薄暑なり星をふやして海は凪
艱難の海を見ているサングラス
夏の海セピアに染まる十一日
海中に痛みまだあり月見草

小熊座に入会して五年目に東日本大震災があり、まもなく次男の突然死があった。現実を受け入れられず、呆然としている私に主宰と句友の暖かい言葉に癒やされ、励まされて今日の私がいる。

改めて日本人が古来から大切にして来た言霊の力を感じている。言霊は生命を甦らせ、あらゆる感覚を敏感にする。頭を上げると青空があった。青空は大きく澄んでおり、ありのままの私を受け入れてくれた。本当にうれしかった。

地方でも老後の生きがいに俳句を志し「季語が覚えられない」と言いながら頑張っている人もいる。句会に来るのが楽しそうで、未熟な私に聞いたりする時もある。

俳句は十七文字で宇宙までも表現できるので、すばらしい文学だと思う。私も主宰の指導を受けながら「限りある生命の存在と輝き」を表現したいと思っている。

（みね）

【東日本大震災五年記念企画】

此の世は戦場

清水里美

＊死と隣り合はせと知らず春の昼
＊せめて目をそらさずにをれ菠薐草
＊かくありてなほ春月を恨まずや
＊初桜生くる限りは希望もて
＊万緑や死は悠久の腕のなか
＊菠薐草この世をしかと見て聞いて
＊掛大根死ぬるも凡といふことぞ
＊白鳥帰る大き口あけ常の国
＊断層の上の原子炉みみず鳴く
＊此の世てふ戦場に咲く桜かな

五年が過ぎ又おびただしい日々が過ぎてゆく。あの日のことを思い出そうとして思い出せない。北海道に暮らしながら、ひどいショックで、記憶が欠落したような気がする。

あまりのことに、働きに行くのが嫌になったが、翌日の稼ぎは赤十字に寄付するのダと言い聞かせた。当時のブログを読むと、忘れてしまった日々がよみがえる。

一二日。昨日から平常の心持ちではない。地震で大変なことになった人々のことをどう考えたらよいのか。原発問題をどう考えたらよいのか。

一三日。スーパーに行くと、この平穏なる日常が、あの町にも、あの町にもあっただろうに、ガレキの山になってしまった、という驚愕が込み上げた。

一九日。お月さまには、人間のことなんて、関係ないのだ。地球にも、人間のことなんて、関係ないのだ。ほんとうに、普段は、甘い考えでいる。自然との存問などと言って。

（里美）

【東日本大震災五年記念企画】

寄り添うこと

杉　美春

＊鎮魂の海へ三椏の白き黙
＊蝌蚪の紐まだ解けずに田圃跡
＊犬ふぐり濃し子どものいない小学校
＊帰る子の足から暮れて桜蕊降る
　名を呼べば一陣の風遠花火
＊本流へ戻れぬ水や虫の闇
＊鍵盤を叩き花野を開けにけり
＊風花やつなぐ手ひとつづつ消えて
＊綿虫や海の続きに空があり
　ヒロシマもフクシマも今聖夜の灯

「車にも仰臥という死春の月」　この句を知り、衝撃を受けたことが私の小熊座入会のきっかけになりました。東日本大震災のテレビ中継で再三流れたときの映像とこの句とがオーバーラップし、津波の怖ろしさ、人知を超えた破壊力を目の当たりにするようでした。それと同時に、車の死という即物的な捉え方と春の月の美しさとが際立つこの句に魅了されました。悲劇の最中にあってなお美しい春の月。被災地から遠く離れて暮らす私に、震災を詠う資格があるのかが疑問でした。この点について高野ムツオ主宰にお聞きしたことがあります。そのとき、たしか「寄り添う気持ちがあれば」というお答えだったと思います。同じ立場でなければ、わからないことは多い。けれど、誰にも近親者を亡くした悲しみはわかるはず。若くして病死した兄や突然自死した弟のことを悼む気持ちは、近親者を亡くされた被災者の方々に寄り添う気持ちに繋がるのだと信じ、俳句を作りたいと思います。

（美春）

【東日本大震災五年記念企画】

青山

須崎敏之

逃水や廃炉四十年仮説
凍土壁は人知の墓誌か鳥曇り
水在れば蝌蚪生る被曝野の水に
黒ビニール詰めの青山在りて無し
実生五年無患子の芽の翼立つ
もう帰らぬ山河の夢に藤懸かる
日輪がぬかるみに浮き被曝蝶
被曝野に生きとし生ける冬構
原発ゼロの冬の灯睦む団地かな
原発再点火寒雷裂けわたり

放射線測定器は、片掌にすっぽり収まる軽便さで、電源ボタンを押せば直ぐにガリガリと音を立てて線量を検出しデジタル表示する。

今、私の掌の中で鳴り続けるのは被曝した地表のうめきのような放射線量の検出擬音である。彼の3月11日、大津波が襲せた福島原発の有様は事実のとおりである。その爆発による物質が集まる放射性雲は3月中、下旬気圧配置と風向き、降雨などにより拡散し13都県3万平方キロ（国土の8％超）の地表に落下した。原発から170キロ離れた我が家周辺も、いわゆるスポット汚染が生じた。私の空間線量の測定では（単位、毎時㎼シーベルト）

平成23年12月屋外0．231屋内0．109。
平成28年6月屋外0．102屋内0．071。

減少率は屋外44％屋内65％となっている。

このように薄くて永きにわたる被曝の諸影響は、一部でつよく懸念されつつも今現在は特段の事もなく靄がかった負の気分を引きずって時は移っている。

（敏之）

【東日本大震災五年記念企画】

その人を思う

田村慶子

＊脳内は大地震のまま穀雨かな
＊みんな出て来い紅梅の空の下
＊改札を抜ければ更地黄水仙
＊エプロンをはずし東北地震忌
＊三・一一我が言の葉の薄っぺら
　いろいろ拾い集めるカラス春の雲
＊レクイエムまだ耳にあり夕紅葉
＊あの春の暗闇ベクレルシーベルト
　公園も港も瓦礫風光る
＊東京の波除稲荷冬木の芽

例えば吟行。今でも空や山を眺めたり、森に居たり、浜辺を歩いていたとしても、フワリと意識の中に存在する。微笑んで

昔、その人は褒めてくれたものである。持っていた黒の日傘、サンダル。ある時は、ピアスがきれいだと。一日を幸福に過ごせた。連れ立って歩けば、鬼房先生に教わったのよと言って「姫踊り子草」、よそさま宅の前の「馬酔木」の名など教えてくれた。私達が例によっておバカな話で大笑いしていても、ウフフフとお日様のように笑っていたっけ。

あの日の大津波のせいで居なくなってしまったけれど、「いつも居る。」のである。知子さん、私は元気でやっていけてます。俳句は難しくて大変で途中下車したくなってばかり。頼りないけど、見ていて下さいね。

（慶子）

【東日本大震災五年記念企画】

未来図のなき未来も　丹羽裕子

＊ふくしまや人には人の桜咲き
＊立ち行かぬ廃炉作業や夏怒涛
＊泥んこの道も道なり春四とせ
＊原発禍死に抗はぬ牛に夏
＊青葉木菟これより帰還困難区
＊試験田に放射能降る雪も降る
＊凍て空にわが位置占めぬ吾妻山
祭笛狼にまた村人に
姿なき狼はいつも村人に
遠吠えは狼の唄こぼれ萩

一人歩きするフクシマ。あれから五年、未だ福島は躓くばかり一歩先も見えない。そんな中、私の出会った二つについて述べてみたい。

大震災、原発禍から二年目、私達家族はかつて住んでいた小名浜へ向かった。平から薄磯海岸そして江名街道へ。一階は柱だけ残り、二階はカーテンが揺れる廃家、瓦礫や土砂で狭められた凸凹の道、黒い袋の山。あの快適なドライブウェイは。小名浜に抜け、三崎公園で海辺が目に入った時、私達の小さな家がすっくと建っていた。胸がいっぱいになり言葉が出ない。二つ目は、帰還困難中、焼失した飯舘村の狼の天井絵の復元展を観たこと。村人との暮らしの中のかれらはなんと愛らしく、無邪気であったことか。胸が熱くなった。正に神の仕草である。

大自然の猛威に無力な人間。また己の利益のためなら容赦ない仕打ちをするのも人間。小名浜の家、狼の優しい眼差、人間として何が大切なことかを教えてくれたように思う。

（裕子）

【東日本大震災五年記念企画】

生国

土屋遊蛍

＊葛の花ここまで海がありました
朝霧や供花に狭みし五郎太石
星涼し雑布百枚遺されて
夢に来て紫蘇の匂いの友なりし
秋蝶とすれ違うのみ生国は
廃線の絮噴きあぐる鬼薊
流灯や胸に眠る子揺すりあぐ
再興の港夕立の土埃
山背吹く海を俯瞰の新駅舎
＊仮葬の土まだ黒し花の奥

あの日以来、みんな人生が一変した。少なくとも海辺の人達は。親や子を失くし親族、友人、知人を失わなかった人は誰一人いないだろう。それでもみんな必死で生きた。流されながら息子に「行けっ行けっ」と叫んだ母、波に攫われ沈んでゆく母を目前に助けられなかったと今も自分を責め続ける人。私達は究極を見、聞き生き続けなければならなかった。そして私達は「いのちてんでんこ」にたどりついた。悲しい、悲しい選択ではあるが、究極を知る者だけが理解出来る、生きてゆかねばならぬ者たちの、あきらめの為の悲しい呪文。「命・てんでんこ」

又、今年も石巻川開祭の日が来る。施餓鬼供養の読経の中、万の流灯が北上川を海へ下る。知りあいの娘であの時学生だった母親が、胸に抱いていた我児を流灯に見せるように、揺り起こして高く抱き上げた。

（遊蛍）

【東日本大震災五年記念企画】

眠る地

中鉢陽子

＊ちちははの還るまで待つ夕桜
＊夏草の中より石工現われる
＊柿若葉輝き出して村の朝
＊蔦からむ昔医院の板塀に
＊サングラス外して別れの握手する
＊青空に国境はない草の花
＊塩害の島の青空小鳥来る
＊父祖の血が騒ぐ厄日の鹿踊り
＊山萩やちちはは眠る地に垂れる
＊新しき卒塔婆に止まる秋の蝶

一人旅をした。賑やかな楽しげな仲間連れの人々を横目に。北の果てまで。乗り飽きて隣合わせた人と言葉を交わした。山ガール風の八十一才の小柄な人だった。年齢にも驚いたがその元気振りと好奇心にも驚いた。若い頃の不摂生を断ち、体に一番いいお金の使い方を考えたら旅が一番と気づいたとかで、一人で北海道を旅している。チャキチャキの下町言葉のその人は、教訓めいたことや愚痴らしきことは一言も言わず、自分を語った。

「肝っ玉の座った人」という表現がある。私はいつも迷いの中にいる。自分のことを自分で決めたいと思いながらなぜか出来ない。しかも最近「お互い様」とか「ギブアンドテイク」とか楽になる言葉を、それも又、人生の旅の味つけになるのではなどと勝手に思い込み今日も又迷いの中にいるのである。

（陽子）

【東日本大震災五年記念企画】

答へなきままに

津髙里永子

噴水の煌む空答へなきままに
くろがねの蟻ちひさくて几帳面
息をして吐いて水母の海に向く
荒梅雨の第二神経内科かな
たまゆらの朝日泰山木の花
蟬の穴地球滅ぶるまで見つむ
北国の夏茱萸種もやはらかし
戻りくる人ごゑ花火果てにけり
戦慄のうすさありけり夏の月
消えてゆく虹追ひかけて狭き国

二〇二〇年開催予定の東京オリンピック会場のひとつ、国立競技場周辺は、ここのところ、トラックや作業車が溢れんばかりで、道路がたいへん渋滞しているらしい。東北の復興もなかなか進んでいないのに、なぜ今、オリンピック、それも東京の周辺での開催なのか、と訝しんでいた私は、そういう話を聞いただけで腹立たしくなる。

何か私にできることはないのか。せめて、みちのく産のものを配送費がかかっても購入すること、贈り物も、まずは東北のものを最優先して考えてみることぐらいか。

阪神大地震を経験した私のふるさと、西宮市は、震災後二十年が過ぎ、新しいきれいな町になって様変わりした。瓦屋根の続いていた古い町は消え去り、マンションがやたらに建って、ブティックかと間違うような一軒家が建ちならぶ。明るく、軽い街並みになったのに、どこか窮屈に感じるのは、作られた町だからかもしれない。

（里永子）

【東日本大震災五年記念企画】

原発炉

土見敬志郎

万葉や蠢くものに原発炉
行く春のセシウムを吐き原発炉
ここよりは帰還はならず花の闇
振り向けばすでに陽炎原発炉
花の闇烈震余震また余震
銜へしは死者の骨かも夏燕
水際に喪章となりし春日傘
庭の木にフクシマフクシマつくつくし
真夜中の浜昼顔に死者の声
夏霧が活断層へ入り込む

阪神淡路大震災から二十一年、東日本大震災から五年有余が経過した。その復興も道半ばである。特に福島原発に於ける放射能汚染で住処を追われた帰還困難区域の人達の絶望に似た焦慮は計り知れない。その渦中に於いて今度は熊本大地震である。

熊本地震においては震度五強の烈震に数回も見舞われ、今尚、余震の終息を見ない。

震災と俳句については此れまでタブー視されてきた感があるが、それは傍観的に時事的に詠うことへの安易さや災害当事者への心情を慮る思いが根底にあったことは否めない。

しかし、今、俳句は災害とどう向き合わなければならないかと言う本質に迫られている。

寒暁や神の一撃もて明けし　和田　悟郎
膨れ這い捲れ攫えり大津波　高野ムツオ

掲句は震災と俳句をいかに詠むか・いやどう記憶されなければならないかを明確に示唆している

（敬志郎）

【東日本大震災五年記念企画】

転生

中村春

手毬唄また暗闇の向かうから
＊春立てり智恵子の空も汚染土も
＊潮騒の捨田となりて鼓草
鉄骨は裸身をさらし霾ぐもり
＊初桜津波到達地点の碑
＊逃げ水に死者の呼ぶ声ありぬべし
あの日から祠も空や木の実降る
＊枯蔓の被曝煉瓦を上りつめ
＊閖上の野面あらはに春を待つ
＊冬干潟誰が転生の鳥一羽

東日本大震災より五年が経って今一番思うのは、中国の知人からの電話のことである。それは福島の原発が危険な状況なのですぐに仙台から避難するよう促すものであったが、私はそれ程深刻には受け止められなかった。

東北大学に勤務していた夫は、震災直後、研究は出来ないものの毎日会議のために出かけた。そこから得られる情報はそんなに切羽詰まったものではなかったし、何より日本は科学的先進国なので、福島の原発がよもや手に負えなくなっているとは全く思わなかったのである。

戦後七十年、日本人は日本国を信じて当たり前のように平和、平穏を享受してきた。現在いろいろな情報を簡単に入手出来るが、情報が過多であるだけに真実がどこにあるのか見極めるのは難しい。自分が老年にさしかかった今、「成るように成るさ」と考えがちであるが、もっとしっかりと社会を世界を見つめなくてはと、改めて思う。

（春）

【東日本大震災五年記念企画】

初御空

永野シン

胸中は風の重さや葦の角
失って見えて来るもの夏の月
逆らわず生きて独りの天の川
我慢することのみ多し半夏生
大夕焼明日来ることを疑わず
百枚の青田の風や先見えず
過ぎて来し苦難いく度草の花
木蓮の答えは祈る形して
濡れ布巾一枚ほどの夏蝶来
忘れてはならぬ震災初御空

悪夢の東日本大震災から5年が経った。21年前の阪神淡路大震災は、火災による被災も多かった。東日本大震災は、巨大な津波の恐ろしさと、続いて気仙沼の火の海と、福島原子力発電所の事故である。まだ雪が降る寒さも厳しかった。

五年が過ぎた今でも原発事故による除染物の処理すらままならず、恐ろしさと不安は胸を重くするばかりである。

余震がひどく熊本の大地震もなかなかおさまらない。重ねて手に負えないような突然の大変な水害。

現在も稼働している国内の原子力発電所は、一日も早く停止すべきではなかろうか。

（シン）

【東日本大震災五年記念企画】

海溝の墓所

浪山克彦

しほたるる災禍の記憶松の花
噛み合はぬ歯で噛むばかり春の雪
鳥山をつくりし陸(くが)もいま春野
海溝の墓所へ日の道月の道
ざうざうと原子炉すすぐ驟り雨
青葉して木々セシウムを上らすか
蟬時雨しぐれぬ森となりにけり
千万の穴蟬死して夏静か
野苺の覚ゆるばかり空の青
永久に溶けず幼霊の雪兎

短編集『水の音』を読んだ。著者の宇津志勇三代は小熊座に籍を置いた時もあり、私にとっては句友の一人であった。福島原発の大事故により緊急避難地区に指定された南相馬市の実家の整理や東電との賠償交渉を一手に引き受けておられたが、本著はその一部始終を縦糸に巻き込まれた兄姉の葛藤を横糸とした震災小説である。

『水の音』の冒頭で、主人公の憲二は久し振りに訪れた実家の庭の奇妙な明るさに驚く。植木の下枝はことごとく刈り落され、剝がされた芝生に代って真新しい砕石が敷かれていたのだ。その光景に憲二は、裾をたくし上げ汚れた水を避けて海辺に立っている幻覚に襲われる。肉体よりもまず精神が被曝していくのだ。

ステージ4の膵臓ガンに冒され、余命一年と宣告された著者の「生きている間に」という必死の想いが、希望や再生といった浮ついた言葉では語れない迫真の遺作となって実った。

（克彦）

【東日本大震災五年記念企画】

時は流れる

野田青玲子

＊喪の花火行方不明と言ふ遺体
＊廃墟行く死霊の如き白日傘
＊確と差し仮設長屋を出る日傘
＊海霧襲ふ仮設の壇の仮牌たち
＊月光を返す瓦礫の船の反り
＊床軋む遺体安置の夜寒の灯
＊雪夜誰呼ぶ仮設の寺の遺骨たち
＊陳列のケーキに朧夜の余震
＊燕来る喪の国なほも山河あり
＊行く春のクレヨンが描く津波かな

老老介護（妻が右膝蓋骨々折、左大腿骨々折、腰椎圧迫骨折等で入退院、リハビリ）で、家事万端の処理、自分自身の通院等で疲労が溜まった。さらに持病の脊柱菅狭窄症が悪化したせいか、87歳の老齢のためなのか、一向に満足な句ができず、時間だけがどんどん過ぎてゆくばかりだ。句作71年の己れの非才を嘆いてもいる。日暮れて道遠しの感がある。しかし、何であろうと、俳句を「生の証」として、残された人生の一日一日を大切に生き、自然と風土に根差した、生活に心をつなぐ句を得たいものだと念じている。

そして焦らずあきらめず、高野ムツオ先生のご指導を頂いて、自分ひとりに用意された独自の道を歩んでゆきたい。

さらに附言すれば、若い気持ちを失わず、年をとることは青春を完成させることだと心得て、俳句を作り続けていきたいものだ、とも思っている。

（青玲子）

【東日本大震災五年記念企画】

更地

服部奈美

＊停電の厨に一人朧月
＊鶯や海まで更地続く町
＊帰りたや冬濤響く家だから
＊白鷺や被災せし田も水落す
＊鬼灯や遊ぶ子の無き浜に熟る
＊晩秋の朝日が包む仮設かな
春塵や津波残せし泥匂う
泥浚うシャベルの重さいぬふぐり
流れ行く家と車や春寒し
電柱に車重なる春の暮れ

3月11日美容室にいた私は大きなドスンときた急な揺れに外に出ました。今までにない地震です。隣の家のブロック塀が崩れ、うずくまった道に亀裂が走りました。上を見ると電線が縄飛びの縄のようです。うずくまった私に先生が覆い被さってかばってくれました。津波がくると思い国道を山に沿って走り15分で山の上にある自宅に帰りました。沿岸のユメッセに行っていた夫と息子は30分程前に塩竈に戻ったという事でした。あと30分長くいたらと思うとゾッとします。自宅がある山にも30人位の人が避難しています。しばらくするとさっき走った国道45号線を津波がきました。家も車も流れています。町内には湾からの津波が合流して柱だけを残して家をつき抜けます。声もなく見ておりました。次の日から泥をかき畳を出し町は灰色の瓦礫と埃の数ヶ月でした。五年がたち新しい町並が出来ましたが空地と立ちいかない店や人達が多くいらっしゃいます。

（奈美）

【東日本大震災五年記念企画】

揺るる大地

平山北舟

＊梅雨寒の揺るる大地もわが故郷
＊津波にて殉職とあり萩の花
＊飛んでも更地飛んでも更地つばくらめ
＊ささくれも陸の破船も寒に入る
＊花火みなかの世の子らに摘まれけり
＊この森はセシウムの森猪の森
＊フクシマの詩は声に出せ道灼くる
＊炎昼のフクシマにゐて口開けず
＊アンダーコントロールとや汚染土に雪積る
ふくしまはやさしき響き桃啜る

罹災当時は勤務地（丸森町）の病院で入院患者の避難、誘導と治療にあたっていました。情報不足のまま南相馬市から市の職員に引率されて百名ほどの住民の方々が避難されて来たので、廃校になっていた中学校の校舎に入って頂きました。その方々は着の身着のままで来られたので、治療中の薬は全く持っておらず、投薬の情報もないので、問診しながら治療にあたりました。当院の入院患者の薬の備蓄も乏しかったのですが分け合って使いました。

国はこの非常時に周章狼狽するばかりだったので、我々は自分達自身で薬、水、食料の確保やガソリンの融通などを行いました。

その怒りや思いを当時から俳句で表して来たつもりですが、力不足で十分表現できておりません。しかし、これからも被災地からの思いを俳句に託して発表して行きたいと思っております。

（北舟）

【東日本大震災五年記念企画】

冬の靄

松岡百恵

各々のあの日を話す花の下
＊窓のなき原子炉建屋百日紅
＊除染とは土剝がすこと残る虫
＊人間に言葉春泥には光
＊悲しみに半減期なし冬の靄
＊海市立つ行方不明者伴ひて
菜の花やみんな光になつてゆく
＊大寒やレールは骨のごと継がれ
心病み時のとまりぬ百合の花
忘れよと追い抜いてゆく風花が

三陸より離れて暮らす私は、作品を小熊座誌で発表することで、被災した者の作品と読まれ、何ともいえない気持ちになったことがあります。いまだにその気持ちは消化しきれないでおりますし、風化という言葉も簡単に口にできません。

昨年、阪神大震災から二十年を経た神戸を訪れる機会がありました。復興を果たした街並みに、風化に抗するような慰霊のモニュメントがあちこちにありました。当時は幼かった若者たちが、震災の記憶がほとんどないにも関わらず語り継ごうとしていました。

心を病んだ人をみかけもしました。二十年前のできごとを伝える新聞記事を読むように、ひたすら独り語りをしつつ街中を駆けていました。その人の時は止まっていました。

私の中の複雑な気持ちがはっきりと言葉になる日がくるとしたら、それが風化なのかもしれません。

（百恵）

【東日本大震災五年記念企画】

天の川

松本芳

慰霊碑に手を合せては息白し
亡くなりし友への祈り春の星
白壁の津波爪痕星月夜
セシウムの降りし山河や天の川
線香を鶏頭たむけ昼下がり
荒海の怒濤の余波や立葵
三陸のリアス海岸松の花
金魚飼ふ震災以後の静かに
災禍地の昼顔の蔓左右へと
永久に咲け君が面影花かをる

二〇一一　三月十一日　午後　二時　四十六分　国内最大M九　記録

その時私は、ボランティアの仕事を終え仲間達と解散、次の日のイベントの作品展の準備で、表具屋様と打ち合わせに急いでおりました。

本当に偶然で、道の途中でバレンタインデーのお返しを買いに百貨店に出かけたはずの夫と出会い、二人で自宅の母を心配していました。

三月にして寒さが肌をさし、時折小雪が続き私は星の美しさに見とれました。後日「災禍の地夜空をかさね星月夜」という句を作り、言葉にすることの大切さを学びました。

これからも俳句を通して、今迄以上に仲間、地域、家族、全てに拘っている方々に恩返しが出来るよう、日々よりよい作品に研鑽出来ますよう努力したいと思っています。

（芳）

【東日本大震災五年記念企画】

黴めんこ

丸山千代子

三月や同じ忌日を記す塔婆
水底へ届く人声花明り
水仙に賛美歌の声透きとほる
臘梅の光掬ひて歩きだす
籐椅子に染み込んでゐる波の音
夏帽を胸に被災の島に佇つ
抽斗に昭和の匂ふ黴めんこ
菊日和握り返せぬ手をさする
石像は抱擁解かず秋桜
冬うらら礼拝堂は畳敷

夢にも思わなかった初句集の上梓で改めて俳句の偉力を感じた。気の向くままに先輩友人教え子等へ送ったところ、一週間位は暇なしの電話毎日のお便りに接しうれしいやら、ご迷惑をおかけしたのではと今更ながら恐縮している次第だ。共感して涙が止まらなかったと手紙の句「亡き人も数えて西瓜等分す」は今は亡きご主人を思い起し胸がジーンとなりましたとの文に接し私の頬も涙に濡れた。

一週間前高校同期約三十人の秋保のホテルでのお祝い会開催の折には、昔通ったクラシックギターの先生の息子さんもかけつけ、食事の間三十分程アルハンブラ宮殿の思い出、沖縄の歌、ボサノバ等演奏してくれた。感動のあまり何人かはハンカチで目頭を押さえていた。年と共に感動から遠のくこの頃だったので特に新鮮さを感じた。又（河北展審査員の書の友人）は早速一句選び出品したから見てほしいとの葉書をもらいバンザイ!!と心で叫んだ。小熊座のもと勉強できる幸せを感謝している。

（千代子）

【東日本大震災五年記念企画】

黄水仙

丸山　みづほ

＊みちのくの枯蘆原よりダンプカー
＊枯蘆原凸凹道を風が抜け
＊鳥帰る荒地に残る潦
＊土手道に津波の記憶つくしんぼ
潮鳴りや消せども消えぬ三月は
倒れしままの石碑五度目の春彼岸
慰霊碑の名を撫づる人黄水仙
＊花菜風名もなきものにこそ力
堆き盛土広がり青やませ
日和山に小さき社殿浜昼顔

私にとって東日本大震災の被災地と言えば隣接する閖上であった。家族でよく遊びに行った地である。また職場で何年か共に過ごした人が犠牲になられたこともあり、追悼のため何度も足を運んだ。行く度に様子が変わっていった。瓦礫が片付けられ鎮魂の場となっている日和山に小さなお社が建立されたのは二年が経った頃。その後道路を隔てた向かい側に犠牲者の名の刻まれた慰霊碑が建てられた。

先日久しぶりに行って驚いた。避難した住民を津波から守った閖上中が解体されていた。そして土台跡だけが広がっていた町の跡には10メートルはありそうな高さの盛土がされていたのだ。この盛土の上に新しい町が築かれていくのだろうか。

名取川の河口近くの土手に津波を免れた「閖上土手の松並」がある。250年閖上を見つめて来たクロマツの並木はこれからも変わりゆく閖上を静かに見つめていくことだろう。

（みづほ）

【東日本大震災五年記念企画】

届かない

武良竜彦

春めきてわれにも果てのありしこと
戻れば春水に文字浮かび消え
百年も千年も今生木の芽和え
がらがらと遺骨洗われ夏の浜
稲妻や倒れし墓石を起こす霊
わが記憶蔦の絡まる胸骨に
遺句一つ宵闇ふたつ星数え
水洟や言葉の根元暮れ残る
木守柿手折れぬ魂の色はるか
波動とは動かぬことよ冬の海

ダンプカーが体の傍を猛スピードで何台も通り過ぎる。その度に舞い上がる土埃でしばらく視界が霞む。お陰で私が操るバイクは灰色だ。荷台に古い木箱を積んでいるが、いつから自分が配達夫になったのか、その記憶がない私は、当然のことだがそれが誰から誰への届けものなのかも知らず、もう何年もこの埃ばかり舞う道を右往左往している。

水平線の手前を通る船が積んでいるコンテナは腐食し始めているのか赤茶けた色をしている。送り主が宛名を書く余裕もなかったらしく、船長は永い間あんなふうに、水平線の手前を右往左往しているのだ。コンテナの中には私の言葉も粉々に分解されて、誰とも知らぬ多くの人たちの言葉の破片と混合されて詰められている気がする。もうその内容も書いた日時も宛先も思い出せない。

いつからか言葉は、書いたそばから消えてゆき、彷徨う古い木箱とコンテナ船のように永遠に誰にも届かない。

（竜彦）

【東日本大震災五年記念企画】

祈り

吉野秀彦

駅舎まで流れた町や夏六度
足跡を重ね供花おく浜に夏
海猫や浪音鬼哭とも思う
鉄筋の錆びるほかなし海開き
人は生き鉄筋は錆び海開き
原子炉の腹へ高速油照
原子炉は凌霄花の紅い色
夕凪や救援物資送付録
夏茜風の電話を探しなさい
蜩や忘れたふりも処世かな

「東日本大震災被害者の方々の心が少しでも安らぎますように」「東日本大震災被災地が一刻も早く復興しますように」。朝の祈りの時間にこの言葉を加えるようになって六年目に入った。

祈りに力があるなどとは言わない。しかし、祈ることで思い続けることはできる。二年間続けた自宅避難者への救援物資の提供は何となく終わったが、被災地に思いを馳せることは続いている。友人の多くいる福島、震災前に訪れ、まるで故郷を見つけたように思えた塩竈の浦戸諸島、誌友の居住地に格別の思い入れを持つ。思いは被災地に赴くきっかけになり今を聴く力を持たせる。

復興への道のりはそれぞれの事情があり一筋縄にはいかないだろう。悶々とした思いを聞くこともある。だからこそ祈り続け思いを馳せていきたい。

（秀彦）

【東日本大震災五年記念企画】

白日傘

山田桃晃

鶏頭のかぐろき五年目の更地
三月は永久に喪の月歩まねば
被曝事故の桜流しの夕渚
いも楢桜流しの瓦礫山
魂は風に預けて青すすき
町ひとつ失せし海鳴りやませ来る
被災地の南瓜の花に髭のびし
慟哭を更地に鎮め浮いて来い
草いきれ更地となりし海の町
海光に万の声あり白日傘

世の中には「出会い」ということがある。人間の予測を越えた全く偶然の出来事も起こる。ある日土塊の間にちょっぴり緑をのぞかせながらひたすら春を持っている小さな芽生えを見つけた、それは母子草である。よくよく注意して見ると厳しい風雪から身を守るかのように、ほんの短い白っぽい綿毛が密生して全身を蔽っている。それが畠といわず道端といわず至るところに生えているのである。畑を荒らす厄介な雑草として嫌われ抜き取って捨てられる。淋しくかなしい草花である。

東日本大震災から五年を過ぎ、この草花との出会いは心に残った。海辺の町の復旧復興をフルにいかして生きる元気な人間でありたいと思う。

（桃晃）

【東日本大震災五年記念企画】

今なお

渡辺誠一郎

フクシマの雲の行き来や罌粟の花
蒼白の万緑にあり帰還困難区
身を離れ行くものばかり夏野原
渾身の炎となりて野馬を駆る
海桐咲く千の靴紐結ばれず
晩夏光骨の数だけさびいたる
不意の日は今なお昏し著莪の花
黒牛はすでに魑魅（すだま）に旱星
白鷺は水澄む空に秘匿せよ
炉心溶解真神呑み込むかに没日

震災から五年が過ぎたが、いまだに海を直視できない。昨年母を失ったが、私にとっては、母の死以上に、震災で受けた衝撃の方が大きかったように思う。

先の熊本地震のニュースを見ると五年前の情景が重なり、被災者の事を想い、胸が痛み、涙が自然に滲んでくる。

わが町は、復興住宅の建設が進み、基幹産業の水産業も震災前の水準に戻りつつある。堤防も高くなった。逞しくこの難局に立ち向かう人もいれば、そうでない人もいる。目に見えない心の傷はなかなか元に戻らない人も大勢いる。

先日、津波に加え、原発事故による放射性物質の飛散によって、いまだに自宅に帰れない住民が多数に及ぶ福島浜通り地区に足を運んだ。線量計が鳴りっぱなしのなかで、言いようのない気持ちになった。

（誠一郎）

【東日本大震災五年記念企画】

鰯雲

高野ムツオ

原子炉が見れば異形か母子草
被曝牛夏百日を喰み通す
被曝牛灼けたる声を発し死す
牛も人もみな恋しやと蚊の声す
荒壁に食い込む西日浪江町
南相馬行バス客は晩夏光
天高く除染袋の肥ゆる秋
登高をせよ汚染土を踏み締めて
被曝後も花を尽くせる草の顔
胞衣となり原子炉包め鰯雲

五月二十六日、俳句仲間とともに福島の被曝地を訪れた。昨年に続き二回目である。児童全員が無事避難した浪江町請戸小は、支援者などのメッセージが書かれた黒板が外されたことだけが唯一の変化で、あとは六年前とまったく変わりはなかった。校塔の時計も津波到達時間を指したままだった。「希望の牧場」の処分を免れた汚染牛たちも、相変わらずゆっくり草を食み、相変わらずゆっくり死を待っていた。飯舘村の汚染土の山を初めて見た。黒いフレコンバックが数段積み重なったものには、これまでも何度か出会ったが、こんな巨大な山は初めてである。全部合わせると東京ドーム十八杯分というデータもある。環境省は、この汚染土を道路などに再利用するという。道路の耐用年数は七十年。放射線量が安全基準まで下がるのは百七十年後。いったい誰が責任をもって見届けるのだろうか。人間は取り返しがつかないことを積み上げているだけである。

以上は「俳壇」8月号の文章の再掲。句はその三ヶ月後、被曝地を想望してのものである。

（ムツオ）